

# 小規模中学校における学び合う教員集団づくり

—相互授業参観を核とした校内研修を通して—

茂木亜希子・高橋 望・野村晃男

群馬大学教育実践研究 別刷

第41号 235～244頁 2024

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター



# 小規模中学校における学び合う教員集団づくり —相互授業参観を核とした校内研修を通して—

茂木 亜希子<sup>1)</sup>・高橋 望<sup>2)</sup>・野村 晃 男<sup>2)</sup>

1) 桐生市立梅田中学校

2) 群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

## A Study of Making a Collaborative Faculty Group in Small Public Junior High School Professional Development focusing on Peer Review Practice

Akiko MOTEGI<sup>1)</sup>, Nozomu TAKAHASHI<sup>2)</sup>, Akio NOMURA<sup>2)</sup>

1) Umeda Junior High School, Kiryu

2) Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

キーワード：小規模中学校、協働性、校内研修、ワークショップ型授業研究会

Keywords: Small School, Collaboration, Professional Development, Lesson Study

(2023年10月23日受理)

### 1. 研究の背景と課題の設定

#### 1.1 問題の所在

中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(2021)では、2020年代を通じて実現を目指す教職員の姿を「教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。その際、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。」としている。ここで示されているように、個々の教師が養成段階に身に付けた知識・技能だけで教職生涯を過ごすのではなく、継続的に新しい知識・技能を学び続けていくことが必要と言える。学校で学び続ける場としては「校内研修」が位置づけられており、教師が、時代の変化に対応して求められ

る資質・能力を身に付けていくため、「校内研修」の充実が求められていると捉えることができる。

#### 1.2 A中学校の実態

A中学校は、生徒数56名、学級数4学級(通常学級3学級、特別支援学級1学級)、県費負担教職員数11名の公立小規模校である。

A中学校のような小規模校の課題として、文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」(2015)では、「教職員1人あたりの校務負担や行事に関わる負担が重く校内研修の時間が十分確保できない」「教員同士が切磋琢磨する環境を作りにくく、指導技術の相互伝達がなされにくい」ことが挙げられている。つまり、小規模校では、校内研修の時間の確保や教員同士が学び合う機会の設定に課題を抱えていると捉えることができる。

A中学校の校内研修は、研修内容に関する資料の共有や知識伝達型の研修など、受動的な研修が中心であり、「教師が学び続ける場」として機能しているとは言い難い状況が見られた。校内研修がうまく機能しな

い要因として、教職員数が少ないだけでなく、校内研修の運営の仕方も挙げられると考えられる。本研究に取り組むにあたって、前年度の2021年5月、全教員対象に「A中学校の強みと弱み」についての聞き取り調査を実施した。その結果、以下のような意見が挙げられた。

#### 〈A中学校の強み〉

- ①教員数が少ないため、協力体制を築きやすい。
- ②全職員で全ての子どもたちに関わりをもてる。
- ③それぞれの教員が把握した情報を共有しやすい。

#### 〈A中学校の弱み〉

- ①教員数が少ないため、一人一人の負担が大きく多忙である。
- ②各教科の教員が一人ずつしかいないため、教科の内容について、相談する相手がいない、学び合う機会がない。
- ③授業研究会では、教科が違うため意見が出にくく、教員相互の学び合いが深まらない。

聞き取り調査から、A中学校においても一般的な小規模校と同様の課題が見られ、教員の協力体制が築きやすく、本来ならば教員相互の学び合いを行いやすい環境であるにも関わらず、現状は学び合う機会がなく、学び合いも深まらない状況が生じていることが明らかとなった。

### 1.3 先行研究の検討

#### (1) 校内研修

加藤(2013)は、教員相互の学び合いを充実させていくために、校内研修において協働体制を整備し、協働過程(RPDCAサイクル)の協働的省察の場でコミュニケーションの質や形態の変革を促した。その結果、日常的に教員同士のコミュニケーションが活性化し、互いの実践を交流したり、教え合ったりするなど、授業改善に向けて支え合う姿が見られるようになり、協働文化が形成され始めたことを報告している。

浦野・南部(2017)は、ワークショップ型の研修会を取り入れた公立中学校での校内授業研修の活性化事例を分析し、一人一授業の実践と相互授業参観、ワークショップ型の授業研究会の有効性を指摘している。

こうした先行研究・実践を踏まえ、本研究は、「校内研修の内容を見直し、協働的に実施していくことにより、研修を活性化させ、学び合う教員集団づくりを目指すこととした。

#### (2) 教員の協働化を促進するための方策

教員の協働化を促進するための方策として、佐古他(2011)は、「教育活動の良循環サイクル」を教員間で共有することを示している。すなわち、「児童生徒の

実態に関する認識を揃え、それにもとづく課題を集団的・組織的に生成し、さらに実践の経過と成果を検証し合う一連のプロセスを共有すること」である(図1)。

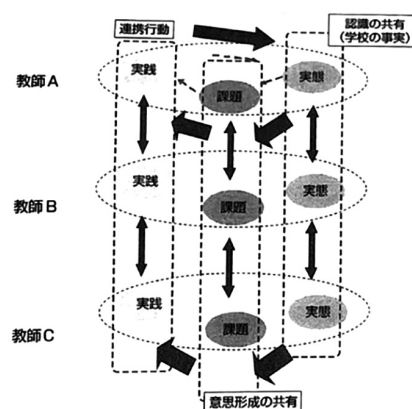


図1 教育活動の良循環サイクル  
(出典：佐古他(2011)、142頁)

また、佐古他(2011)は、協働化のためには、学校組織の体制や運営について、①「学校の児童生徒の実態と課題、実践とその成果に関する情報と共有を行う場を学校の『コア・システム』と位置づけ、その場が組織的に機能しうよう、時間の確保、教員の配置などの資源の投入を行うこと」、②「コア・システムにおいて交換され検討された結果を整理し集約して、教員にフィードバックする協働プロセスの支援機能(プロセス・ファシリテート(以下、PF)と略称)チームの支援機能)を整えること」の2つの条件を満たすことが必要と指摘している(図2)。

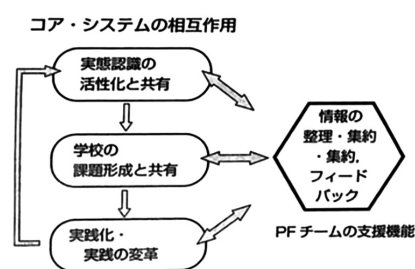


図2 コア・システムとPF機能  
(出典：佐古他(2011)、148頁)

生徒の実態の把握から、課題の生成、実践、実践の検証・評価の一連のプロセスを共有する場を設定し、丁寧に教育活動を進めていくことにより、教員同士の学び合いが促進され、教員個々の成長につながっていくことが期待できる。この「教育活動の良循環サイクル」を教員の相互作用の中で展開していく組織体制を構築するとともに、すでに存在しているA中学校の組

組織体制や運営を見直し、佐古他（2011）の示している2つの条件を満たすよう修正していくことが有効であると考えた。

## 2 研究の目的と方法

### 2.1 研究の目的

以上の先行研究の検討を踏まえ、本研究では「一人一授業の公開」「相互授業参観」「授業研究会」を全職員で実施する協働的な校内研修を通して、学び合う教員集団づくりを行うことを目的として設定した(図3)。

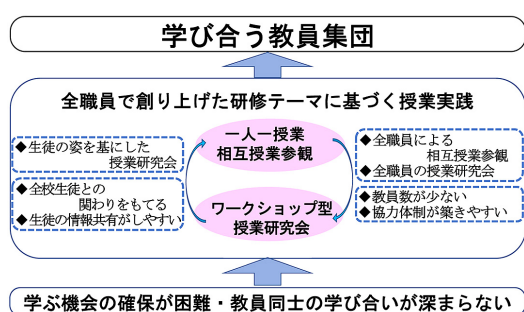


図3 研究の進め方の構想

### 2.2 研究の方法

校内研修を充実させていくために、①課題決定のプロセスを全教員で担う、②実践・実践の評価・検証を計画的に行う、③研修にワークショップ型研修を取り入れる、ことを手立てとした。本研究は、実践の準備と実践の2段階に分けて、2021年度から2022年度の2年間で実施することとした(表1)。

表1 研究の進め方

段階	内容
1	生徒の実態を共有し、課題を生成するプロセスを全教員で実施し、「目指す生徒像」を確立し、研修テーマを共有する。
2	研修テーマに基づく一人一授業の公開、相互授業参観、授業研究会を全教員で実施することで、実践の共有を図る。

#### (1) 課題決定のプロセスを全教員で担う

第1段階として、2021年度中に次年度の校内研修について全教員と一緒に考える場を設定し、研修テーマの共有を図ることとした(図4)。また、このテーマについては、2022年度に行う実践・実践の評価・検証においても全教員が常に意識できるようにしていく。

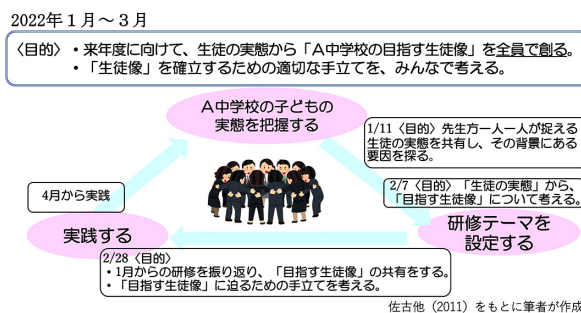


図4 実践の準備段階

#### (2) 実践・実践の評価・検証を計画的に行う

第1段階で創り上げた研修テーマに基づき、「一人一授業の公開」「相互授業参観」「授業研究会」を全教員で実践し、共有していく。実践にあたり、一人一授業の公開を一人ずつ順番に実施し、全教員がリレーのバトンをパスするように次の教員へとつないでいくことにより、学び合いを深めていく(図5)。その際、校内研修全体会を「学校の生徒の実態と課題、実践とその成果に関する情報と共有を行う場」とし、研修委員会を「協働プロセスを支援する機能」として、交互に実施する。特に、研修委員会では、「校内研修全体会の協議内容を整理・集約し、教員にフィードバックすることで、協働プロセスを推進する場」「校内研修全体会を実施するための打合わせやリハーサルを行うなどの準備をする場」の2つの機能をもたせていく。

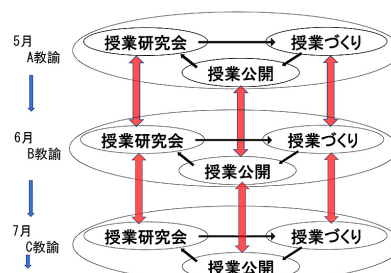


図5 一人一授業の公開のイメージ図

#### (3) ワークショップ型研修

校内研修では、ワークショップ型研修を取り入れ、生徒の実態を共有し、課題を明確化していく。そこから、目指す生徒像を確立し、研修テーマを一緒に創り上げるプロセスを共有していく。研修委員会では、校内研修全体会での協議内容を整理・集約し、教員にフィードバックすることで、協働プロセスを推進させていく。



### 3 研究の実践

#### 3.1 実践のための準備段階（2021年度）

研究の第1段階では、2022年度の校内研修について全教員と一緒に考える場を設定し、研修テーマの共有を図ることを目指し、「(1) 生徒の実態に対する認識の共有」「(2) 目指す生徒像の確立」「(3) 目指す生徒像に迫るための手立ての具現化」「(4) 2022年度の校内研修」の4つのステップで進めた(表2)。ここでは、佐古他(2011)の示す協働化のための2つの条件を満たすよう、校内研修全体会を「学校の児童生徒の実態と課題、実践とその成果に関する情報と共有を行う場」とし、研修委員会を「協働プロセスを支援する機能」として、交互に実施した。

表2 2022年度の校内研修に向けた準備段階(研究の第1段階)の計画

日時	内 容	実施形態
12/24 (金)	(1)-① 1/11の校内研修全体会の事前準備 ・生徒の実態に対する認識の共有のための事前準備として、教員に生徒の実態の付箋紙への記入を依頼する。	職員 打合せ
1/6 (木)	(1)-② 研修委員会の運営・1/11の事前準備 ・研修テーマ作成までの計画について提案する。 ・1/11の校内研修全体会でのワークショップのリハーサルを実施する。	研修委員会
1/11 (火)	(1)-③ 生徒の実態の共有・課題の生成 ・教員一人一人が捉える生徒の実態を共有し、その背景にある要因を探る。	校内研修 全体会
1/27 (木)	(1)-④ 1/11の協議内容の整理・集約 ・1/11の校内研修全体会の協議内容の整理・集約を行い、生徒の課題を明確にする。 (2)-① 2/7の事前準備 ・2/7の校内研修全体会でのワークショップのリハーサルを実施する。	研修委員会
2/7 (月)	(2)-② 目指す生徒像の確立 ・「生徒の実態」から、「目指す生徒像」について考える。	校内研修 全体会
2/22 (火)	(2)-③ 2/7の協議内容の整理・集約 ・2/7の校内研修全体会の協議内容の整理・集約を行い、目指す生徒像を確立し、研修テーマを設定する。 (3)-① 2/28の事前準備 ・2/28の校内研修全体会でのワークショップのリハーサルを実施する。	研修委員会
2/28 (月)	(3)-② 目指す生徒像に迫るための手立ての具現化 ・目指す生徒像に迫るための手立てについて考える。 (4) 2022年度の校内研修 ・2022年度の校内研修の進め方について説明し、共通理解を図る。(大学院での課題研究について説明)	校内研修 全体会
3/15 (火)	(3)-③ 2/28の協議内容の整理・集約 ・2/28の校内研修全体会の協議内容の整理集約を行い、目指す生徒像に迫るための手立て具現化する。 (3)-④ 研修テーマの設定 ・ここまで実施した研修委員会・校内研修全体会の協議内容を整理し、2022年度の研修テーマを設定する。	研修委員会

#### (1) 生徒の実態の共有・課題の明確化

準備段階として、初めての研修委員会を開催した。A中学校の研修委員会は、今まで多忙などの理由から機能していない状況が続いていたため、研修委員会の開催とその役割について説明を行い、共通理解を図った。さらに、1月に実施する校内研修全体会の内容について検討し、そのリハーサルとして2回のワークショップを実施した。研修委員にはファシリテーターとしての役割について理解してもらえるように配慮し、その上で、校内研修全体会でファシリテーターとしてグループ協議を進めてもらえるように工夫した。

1月の校内研修全体会では、まず、2022年度の準備段階として実施する全3回の研修の目的や流れについて説明し、教員間の共通理解を図った。その上で、研修テーマ作成までの1つ目のステップとして、教員一人一人が捉える生徒の実態を共有し、その背景にある要因を探るためのワークショップを実施した。

ワークショップ①は、「学校生活で見られるA中学校の子どもの魅力・弱さ」について、事前に記入した付箋紙を用いて整理しながら共有を図った。ワークショップ中には、「同じことを感じてた」など話が盛り上がり上がり、大きく頷いたりしている様子が見られた。研修全体会後の振り返りから、教員が普段何気なく感じていることを共有する機会を改めて設定することの意義を感じられた。

ワークショップ②においては、「魅力」や「弱さ」の根っこにある要因について、話合いを進め、「魅力」や「弱さ」の根っこにある要因をまとめ、生徒の課題として見出した。

#### (2) 目指す生徒像の確立

研修委員会では、1月に実施した校内研修全体会のワークショップで協議した生徒の実態と課題について整理・集約を行った(図6)。さらに、それをもとに、2月の校内研修全体会でのワークショップのリハーサルを実施した。リハーサルを行ったことにより、次回のワークショップでは、グループで話合いを行う前に、個人の考えを付箋紙に記入する時間を長めに設定した方がよいということが確認され、校内研修全体会での時間設定について変更を行った。

2月1回目の校内研修全体会では、まず、研修委員会で整理・集約した資料をもとに1月の研修内容を振り返り、研修委員会でまとめた「生徒の課題」につい

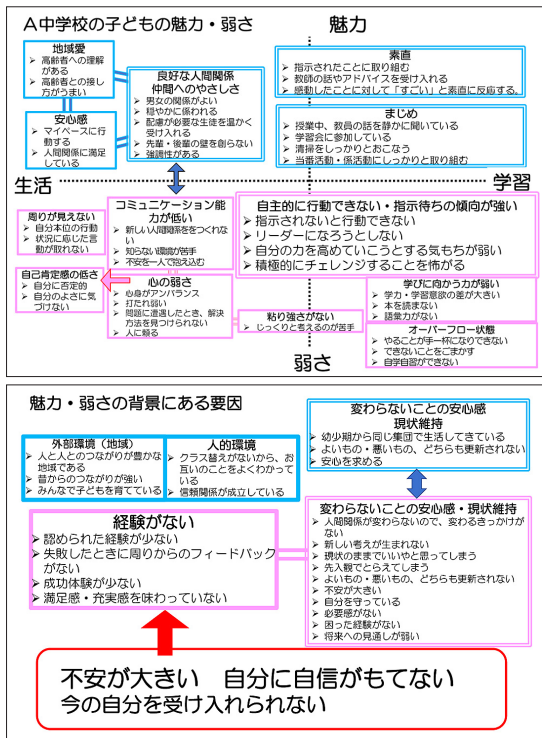


図6 生徒の実態と課題

て共通理解を図った。その上で、研修テーマ作成までの2つ目のステップとして、「生徒の実態」「生徒の課題」を踏まえ、どのような力を身に付けた生徒を育てたいかを探り、「目指す生徒像」の確立につなげるためのワークショップを実施した。ワークショップでは、個人の考えを付箋紙に記入するのに苦戦している様子が見られた。そのため、研修委員が各グループでアドバイスをを行うようにした。研修委員会での事前のリハーサルが、教員が付箋紙を記入する上で苦戦している原因を理解し、的確なアドバイスをすることにつながったと考えられる。各グループの協議内容を共有する際、多くの教員が大きく頷きながら他グループの協議内容を聞いている姿を確認することができた。これは、全教員で生徒の実態を共有したことによるものだと考えられる。

(3) 目指す生徒像に迫るための手立ての具現化

研修委員会では、前回の校内研修全体会の協議内容を整理・集約し、各グループから出された共通の意見をもとに目指す生徒像を確立し(図7)、それをもとにして次回の校内研修全体会でのワークショップのリハーサルを実施した。

2月2回目の校内研修全体会では、まず、研修委員会で整理・集約した資料をもとに、ここまで実施してきたワークショップのフィードバックを行った。そし

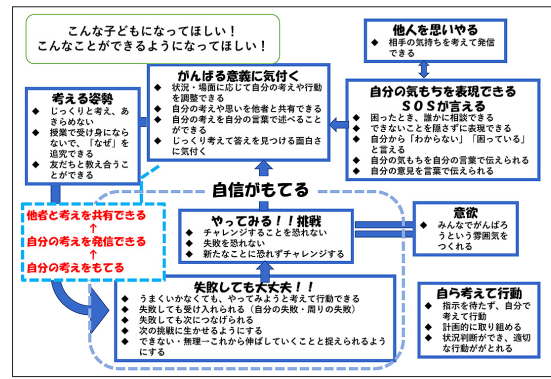


図7 目指す生徒像

て、研修委員会でもとめた「目指す生徒像」について説明し、共通理解を図った。その上で、研修テーマ作成までの2つ目のステップとして、「目指す生徒像」に迫るための手立てを考えるワークショップを実施した。

ワークショップでは、付箋紙の記入や協議の進行が円滑に進む様子が見られた。これは、研修委員が研修委員会でのリハーサルを生かし、付箋紙の記入がしやすいように的確な声かけやアドバイスをを行いながらワークショップを進めたことに加え、教員がワークショップ型の研修に慣れてきたことによるものだと考えられる。

3月の研修委員会では、ここまで実施した研修委員会、校内研修全体会の協議内容を整理し、2022年度の校内研修テーマ(案)を設定した(図8)。校内研修テーマ(案)は2022年度の校内研修全体会で共通理解を図り、実践につなげていくこととなった。

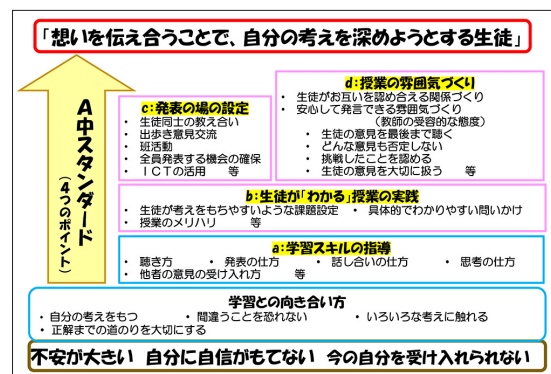


図8 目指す生徒像に迫るための手立て

(4) 2022年度の校内研修の方向性の共有

2021年度最後の校内研修全体会では、全教員と一緒に創り上げてきた「校内研修テーマ(目指す生徒像とその手立て)」に基づき、4月からの校内研修の進め方について説明する場を設定した。「A中学校の教員の少なさを強みとして、一人一授業の公開、相互授業

参観、授業研究会を一人ずつ順番に実施し、全教員がリレーのバトンをパスするように次の職員へとつないでいくことにより、学び合う教員集団に成長していき」と提案し、一緒に創り上げた「研修テーマ」に基づき実践していきたいことを伝えた。さらに、実践することにより、生徒も「目指す生徒像」へと成長していくことが期待でき、A中学校をよりよい学校にしていくことを伝えた。説明を聞きながら頷く教員の様子が多く見られ、2022年度の校内研修については、教員の理解を得ることができたと考えられる。

#### (5) 実践のための事前準備のまとめ

準備段階では、3回の校内研修全体会を実施し、その中で4回のワークショップを行ってきた。ワークショップでは、付箋紙を共有しながら話が盛り上がる様子や、意見を聞くときに大きく頷いたりしている様子が見られた。このような教員間での認識共有の場を設定することの必要性が確認された。さらに、2022年度の校内研修に向け、共通理解ができたことや実践への意欲を感じることができた。全教員で創り上げた校内研修テーマに基づき学校全体で取り組んでいくという協働体制を築き、2022年度につながる研修となったと考えられる。

研修委員会では、校内研修全体会での協議内容の整理・集約を行うように工夫してきた。協議内容の整理・集約をする過程において、研修委員の間で生徒の実態の共有が促進され、次の校内研修全体会で、研修委員が協議を円滑に進められるように例を示したり、的確にアドバイスをしたりと働きかける姿が見られた。また、研修委員会でワークショップの事前のリハーサルを行ったことにより、協議をする上で配慮すべき点が明らかとなり、見通しをもって校内研修全体会を実施することができた。

### 3.2 校内研修テーマに基づく授業づくり

#### (2022年度・1学期)

A中学校では、2021年度末人事異動により、校長が交替した。そこで、2022年度の始めに校長に筆者の研究の内容と、1月から実施してきた校内研修について説明を行い、理解を得た上で、実践を開始することとなった。

研究の第2段階の開始にあたり、研修委員会で、準備段階で作成した校内研修テーマについて再度検討を行い、校内研修全体会で共有を図った。ここでは、研修資料NO.1「R4校内研修：研修テーマ誕生ストーリー」(図9)を基に<sup>1)</sup>、第1段階で実施した校内研修について振り返り、2022年度の研修テーマは、全教員が参加のもと一緒に創り上げたものであることを意識してもらえるようにした。さらに、職員室に掲示スペースを作成し、研修テーマの意識化を図った。

1学期は、4回の一人一授業を実施し、実施に合わせて計画的に研修委員会、校内研修全体会を設定した(表3)。



図9 研修資料

表3 1学期の一人一授業

	一人一授業	校内研修全体会	研修委員会
(1)		4/11(月)	4/6(水)
(2)	5/10(火)筆者「3年数学」	5/16(月)	5/12(木)
(3)	6/26(木)1年担任「道徳」 ※前期指導主事学校訪問日に一人一授業として実施し、授業研究会を行った。	5/26(木)	5/31(火)
(4)	6/6(月)教務主任「1年国語」	6/13(月)	
(5)	6/14(火)2年担任「2年道徳」 ※一人一授業ではないが、授業公開、相互授業参観を実施した。授業研究会は行わなかった。		
(6)	7/4(月)3年担任「3年道徳」	7/4(月)	7/1(金)
(7)	※地区別人権教育研究教育協議会の授業づくりの一環として、東部教育事務所指導主事の訪問に合わせて実施した。		7/14(木)

#### (1) 一人一授業・相互授業参観・授業研究会

実施時間割調整により、全員が参観可能な状態で公開を行う計画であったが、学校行事等の兼ね合いもあり、計画通りの実施が困難なこともあった。そんな中、授業内容を調整して参観するなど、協力を得ることができた。

授業研究会では、付箋紙の記述が曖昧なもので、生徒の姿が具体的に記述されていなかったり、一人一授業の授業参観のポイントが明確でなかったりしたことで、授



業研究会が一般的な話し合いで終わり、深まっていけない状況が見られた。また、付箋紙の記述が少なく、授業研究会での発言が少なくなってしまうこともあった。

2学期の実践では、再度、具体的な生徒の姿から、授業を考えていく意図を確認する機会を設定し、付箋紙の記述にも生かしていけるよう働きかけを行うこととした。さらに、参観時にメモがとれるように参観シートを準備し、付箋紙の量の増加と、記述内容の改善を図っていくこととした。

#### (2) 研修委員会

計画段階では、研修委員会を協働プロセス支援の場として位置づけ、校内研修全体会での協議内容を整理・集約し、教員にフィードバックすることで、協働プロセスを推進させていく役割を担うものとした。しかし、実際は校内研修全体会での授業研究会がうまくいくように相談したり、実際にリハーサルをしたりする場としての役割が中心となり、協働プロセス支援の場としての役割を担うことができなかった。実践を振り返り、どちらの役割も、A中学校には必要であると感じた。

2学期は、協働プロセス支援の場として、授業研究会でのグループ協議からの学びを研修委員会で再度集約し、全体にフィードバックしていく機能も担えるように取り組んでいくこととした。

### 3.3 校内研修テーマに基づく授業づくり

#### (2022年度・2学期)

2学期は、夏休み中の研修委員会で検討した計画に基づき、3回の一人一授業を実施した。全教員が参加できるように計画した日程ではあったが、出張や外部との関わりの中で行う授業などにより、実際には全員参加で行うことはできなかった。しかし、2学期の始めに予定を確認したことにより、見直しをもって取り組んでもらうことができた(表4)。

表4 2学期の一人一授業

	一人一授業	校内研修全体会	研修委員会
(1)		8/25(木)	
(2)	8/30(火)2年担任「2年道徳」	9/5(月)	学校行事等により実施できなかった
(3)	10/11(火)2年主任「1年社会」	10/17(月)	11/1(火)
(4)	12/6(火)1年主任「1年音楽」	12/6(火)	12/15(木)

#### (1) 一人一授業・相互授業参観・授業研究会

授業研究会のもち方とともに、付箋紙の記述の仕方について確認する機会を設定し、付箋紙の量の増加と

記述内容の改善を試みた。3回の授業研究会では、付箋紙の記述内容の変化や、発言内容に生徒の具体的な姿が現れるようになってきたのを感じることができた。授業者・参観者ともに、授業参観のポイントを意識し、共有して授業研究会を進めていくことが大切であることが明確となった。しかし、ファシリテーターの協議の進め方により、話し合いが授業参観のポイントからずれてしまう状況がみられた。

#### (2) 研修委員会

研修委員会の中で、校内研修全体会での協議内容を整理・集約できるように振り返りを行い、研修資料としてまとめることで教員にフィードバックし、協働プロセスを推進していけるようにした。配付された研修資料に、各教員がしっかりと目を通して様子が見られ、フィードバックの機能を担うことができていたと感じる。

## 4 成果と課題

本研究の成果と課題を明確にするため、2022年12月に教員に対するアンケート調査(管理職をふくむ全教員10名)と研修委員(管理職をふくむ4名)へのインタビューを行った。

生徒に対しては、2022年5月と10月にアンケート調査を実施した。

### 4.1 成果と課題

#### (1) 教員集団・教員個人の変容

##### ①一人一授業

アンケートの回答には、「より深い教材研究をすることは、教員としての資質向上にとっても役立つ」と述べられていることから、実施することの意義や必要性を感じていると判断することはできる。さらに、「各先生方が校内研修テーマを意識した授業づくりができた」「目指す生徒像があることにより、一人一人が無意識のうちに目指す生徒像を目指した指導ができた」などの意見から、リレー形式での一人一授業の公開が、12月までの期間、研修テーマを意識して授業を行うことにつながっていたと考えることができる。2021年度に全教員で「目指す生徒像」を考え、共有できるようにしたことも、教員の研修テーマへの意識を持続させることにつながっていたと考えられる。

研修委員へのインタビューでも、「一人一授業を実

施することにより、授業づくりに緊張感が生まれてよかった」「昨年度考えた目指す生徒像を、全教員で意識して取り組めたことはとても意義があった」「校内研修テーマを意識した実践に結びついていた」といった意見が出され、全教員が一人一授業を実施することの意義は大きかったと捉えることができる。

その一方で、一人一授業の公開を負担に感じていた教員もいた。授業を参観されることに慣れていない教員にとっては、多くの教員が1時間ずっと授業を参観することに対して、プレッシャーが大きかったと考えられる。そのため、今後もこの取組を継続することで授業を公開し検討することを習慣化し、資質向上を図っていく必要がある。

## ②相互授業参観

アンケートの「指示の仕方や生徒への声かけの仕方」「他教科の工夫」「生徒をやる気にさせる問いかけ」「気づきをもたせるような活動」「タブレットなど使えなかったものが使えるようになった」という意見から、指導技術や指導法など、他の教員のよさを学ぶ機会となったことが窺える。さらに、「勉強になった」「今後は、その力を授業のどの場面でどう使うか、考えていきたい」と述べられていることから、各教員の授業改善につながっていたと考えられる。各教員にとって、相互授業参観を実施することは、今までの自分の授業を振り返るよい機会となるとともに、授業力を向上させていく意欲につながっていたと判断できる。

また、養護教諭の回答に「生徒を理解する上でたいへん役立ち、良かった」とあり、相互授業参観が生徒理解に役立っていたことが確認できた。相互授業参観後に、自分の授業ではなかなか課題に取り組めない生徒が、参観した他教科の授業では身を乗り出して発言していたり、その逆で自分の授業では生き生きと発言している生徒が、他教科の授業では集中していなかったりする様子が教員同士の会話の中で語られていたこともあった。このような様子からも、相互授業参観が教師の生徒理解につながったことが確認できた。

研修委員へのインタビューでは、「教科の特性に偏らない生徒個々の集団や成長に関わる視点をつくることにより、すべての職員が授業参観を実施することができた」「見合うことにより、各先生方のもっている指導技術を学び合うよい機会となっていた」という意見が出され、相互授業参観の意義はあったと考えられる。

一人一授業の公開日は、全教員で相互参観できるように調整を行ってきた。しかし、生徒対応や出張などで参観できない教員もいた。授業研究会前に、授業の様子を知ってもらえるような手立てを講じる必要があることが課題として見えてきた。また、より綿密な調整を図っていくことの必要性が確認された。

## ③授業研究会

授業研究会では、「他の先生方からコメントをいただくことで視野が広がった」「今まで見えていないものが見えたり、理解できたりした」「授業に関してアドバイスをいただくことができた」と述べられているように、教員にとって授業改善につながる学びがあったと考えられる。

さらに、意見交流に関して、「教育の楽しさを感じることができるといった」「授業のことや生徒のことについて話す機会が増えた」などの意見が見られ、授業研究会を実施することの意義を実感している様子を窺うことができた。

ワークショップ型の授業研究会についても、「意見が言いやすく議論ができて良かった」という意見が述べられており、A中学校にとっての有効性を感じることができた。

研修委員へのインタビューでは、「協議の視点を明確にして情報交換することにより、より意見交換が活発に行われていた」「それぞれの先生が培ってきた教育手法や経験の情報交換により、個々の職員がもつ不安感の払拭につながっていた」「少人数で話す機会を設定することにより、一人一人がたくさん話す機会がもててよい」「回を重ねる毎に情報交換が積極的に行われ、年齢、専門性、分掌、立場にこだわることなく情報を提示することにより、職員間のコミュニケーションの活性化にも結びついていた」といった意見が出された。授業研究会を続けてきたことにより、情報交換が活発になり、教員間のコミュニケーションの活性化につながったと考えられる。

その一方で、授業研究会では、ファシリテーターの協議の進め方により、曖昧な一般論で終わってしまったり、話合いが授業参観のポイントからずれてしまったりする状況が見られ、ファシリテーターの在り方について再考する必要性が看取された。

## (2) 生徒の変容

教員アンケートの回答には、「達成感を感じたり、

『わかった』と感じたりしている姿」や「生徒はだんだん上手に伝え合うようになり、他の人の意見を参考にしたり、さらに自分の考えを深めたりする姿などが見られるようになってきた」という記述が見られ、教員の実感として少しずつであるが、生徒が変容してきているのを感じている様子が窺える。

研修委員へのインタビューでも、「生徒が自分に自信をもって活動に取り組んでいる」といった意見が述べられ、「目指す生徒像」を共有し、校内研修に取り組んできた成果が現れ始めていると考えられる。

その一方で、アンケートからは「まだまだ目に見えない形での変容は見られない」などといった記述も複数見られ、教員が校内研修テーマを意識し授業づくりに取り組んできたものの、生徒の変容としては現れていないとも捉えることができる。

そのことは、生徒のアンケート結果からも、垣間見ることができる。表5は、生徒対象アンケートの中から、校内研修テーマと関連する質問項目を抜粋したものである。各質問に対し、生徒は「1あてはまらない」「2あまりあてはまらない」「3まあまああてはまる」「4あてはまる」の4段階で回答をしている。5月と10月を比較してみても、どの学年においてもわずかに得点が下がっていることがわかる。これは、2回目のアンケート実施の時期が10月と早い時期であったことや、学校行事や定期テスト後の慌ただしい日程の中で実施したことなどが影響をしていることも考えられる。しかし、この結果からもわかるように、教員が研修テーマを意識し「目指す生徒像」に迫るための授業を実践しようとしている一方で、生徒は授業が変わったと感じたり、自分自身の考え方や行動が変わったと感じたりしていないことが指摘できる。

教員アンケートの記述にも「すぐに結果が出るもの

ではない」「繰り返していくことが大切」とあるように、今後も研修テーマを意識した取組を継続していくことや、2022年度の研修テーマを見つめ直し、新たな手立てを講じる必要があると言える。

## 4.2 考察と今後の展望

### (1) 総合考察

全教員で一緒に研修テーマを創り上げ、共有したことにより、同一方向に向かって指導を行っていかうとする雰囲気は教員間に醸成されるようになり、学年や教科を超えて学び合う集団づくりに一定の成果があったと考える。これは、自分たちが考えた研修テーマであることにより、当事者意識が生まれたと考えられる。さらに、研修テーマの共有を促進させ持続させるために、職員室の掲示スペースに掲示して視覚化を図ったり、授業以外の場面でも研修テーマとの関連を持たせ、発信し続けたりした。

ここから、研修テーマを共有し、実践につなげていくためには、研修に携わる全教員で作成の段階から共有していくこと、作成しただけで終わりにならないように、適切にフィードバックをしていく機会を設定することが必要であることが明らかとなった。

5月からほぼ月1回のペースで一人一授業の公開と相互授業参観を実施してきた。小規模校非常勤講師の来校日に合わせて一人一授業の公開を行うようにしたことで、出張の教員を除いた全教員で相互授業参観を実施することができたことは一定の成果があったと考える。一人一授業の実施、相互授業参観といった実施経験や習慣がなかったA中学校の教員にとって、5月の開始当初は負担感を感じている教員もいたと考えられる。しかし、一人一授業を実施することが、授業力の向上に一定の成果をもたらしていたと考える。さらに、相互授業参観も繰り返し行っていくことで、他の教員の

表5 生徒アンケート結果

時期	授業の中で、自分の想いや考えを書いたり、話したりするなど表現している。		授業の中で、友だちの想いや考えを聴くようにしている。		授業の中で、友だちの想いや考えを聞き、自分の考えをもう一度見つめ直すようにしている。	
	5月	10月	5月	10月	5月	10月
1年生	3.42 (.79)	2.92 (1.17)	3.50 (.67)	3.25 (.97)	3.00 (.85)	3.00 (1.04)
2年生	3.20 (.70)	2.90 (.79)	3.40 (.60)	3.50 (.51)	3.35 (.59)	3.30 (.73)
3年生	2.88 (.62)	2.83 (.84)	3.38 (.50)	3.58 (.52)	3.25 (.68)	3.00 (.43)
学校全体	3.15 (.71)	2.89 (.90)	3.42 (.58)	3.45 (.66)	3.23 (.69)	3.14 (.77)
F値 学年/時期 学年×時期	F(5,90)=1.46, n.s.		F(5,90)=.41, n.s.		F(5,90)=.91, n.s.	



指導について学び合うだけでなく、生徒理解も深まっていく様子が見られ、A中学校に相互授業参観をする習慣が生まれ、その意義が理解されたと考えられる。

授業研究会では、生徒の学びの姿を基にした授業研究を行うことで話し合いを深めていきたいと考え、ワークショップ型研修を行ってきた。相互授業参観でとらえた生徒の具体的な姿や、気づき、感想などを記述した付箋紙を持ち寄り、模造紙に類型しながら整理し、話し合いを進めてきた。授業研究会も回を重ねる毎に教員の発言内容が深いものとなったり、発話が増加したりと、活性化していったと言える。教科の違いを乗り越え、教員同士が学び合う集団へと成長していると捉えることができる。

しかし、ファシリテーターの話し合いの進め方により協議内容が深まらなかったり、話し合いが授業参観のポイントからずれてしまったりという状況も見られた。授業研究会に先立って、より綿密な打合せが必要であることが、課題として見えてきた。さらに、ワークショップでの協議をより充実したものにしていくためには、ファシリテーターの力量が問われる。本研究の第1段階では、事前にワークショップのリハーサルを実施してきたことにより、校内研修全体会でのワークショップを円滑に進めることができた。しかし、第1段階のようなリハーサルの時間を毎回設定することは困難である。事前の打合わせで参観のポイントや協議の進め方をしっかりと確認していくことが重要であることが明らかになった。また、よいファシリテーターのもとワークショップを経験することにより、次の担い手となるファシリテーターの育成につながることも期待される。

## (2) 今後の展望

本研究では、小規模校の利点を生かし、「一人一授業」「相互授業参観」「授業研究会」を実施することにより、学び合う教員集団づくりを行うことに一定の成果を得ることができたと考えられる。全教員で目的を共有して教育活動に取り組んでいくことは、授業力の向上だけでなく、学校の教育力そのものを向上させていくうえで重要と考えられる。

また、本研究を通して、全教員で実施可能な体制を

整えるためには「調整」が必要不可欠であることが改めて確認された。校内研修体制を整えたり、教員間のコミュニケーションを促進させたりするなどの工夫を意識することにより、小規模校の利点を生かした全教員での協働的な校内研修は実現したと言える。

本研究の実践、成果と課題を踏まえ、今後も小規模校の利点を生かした取組を継続し、教員同士の学び合いを促進させる方策を模索していきたい。

(本稿は、茂木による2022年度群馬大学教職大学院課題研究報告書の一部を抜粋し、加筆修正したものである。高橋、野村が全体の調整を行った。)

## 注

1) 筆者は、研修内容の整理・共有化のため、定期的に「研修通信」を発行し、教員間に配布した。

## 主要引用・参考文献

- ・浦野弘・南部昌敏「授業実践力の向上を目指した校内研修の活性化に関する研究―校内授業研修を成功に導いた事例を通して―」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第39号、pp.115-125、2017。
- ・鹿毛雅治・藤本和久『「授業研究」を創る』教育出版、2017。
- ・加藤鋭之「教員の資質能力向上を目指した校内研修に関する研究―小規模校における同僚性を重視した授業研究の在り方―」『愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集』巻4、pp.321-330、2013。
- ・佐古秀一『管理職のための学校経営R-PDCA』明治図書、2019。
- ・佐古秀一「学校の組織特性と組織会への課題」木岡一明編『学校の組織設計と協働体制づくり』教育開発研究所、pp.14-20、2003。
- ・佐古秀一・曾余田浩史・武井敦史著『学校づくりの組織論』学文社、2011。
- ・中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』2021。
- ・村上雅弘『ワークショップ型教員研修 はじめの一步』教育開発研究所、2016。
- ・文部科学省『公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～』2015。
- ・渡辺貴裕『授業づくりの考え方』くろしお出版、2019。

## 付記

本研究にあたり、勤務校のA中学校の管理職を始めとする教職員のみならず、多大なるご協力をいただいた。御礼申し上げます。

(もてぎ あきこ・たかはし のぞむ・のむら あきお)